

なぜ外国で日本の「キャラバンメイト」を養成するのか。

日本では「認知症サポーター」を養成するための講師「キャラバンメイト」が、厚生労働省と地方自治体の担うキャラバンメイト事業本部により養成されてきました。「キャラバンメイト」は各地で認知症についての啓蒙活動をし、「認知症サポーター」を養成、その数は当初の目標であった百万人を遥かにしのぎ、間もなく五百万人に届こうとしています。日本ではこうして各地に「認知症サポーター」が育ち、高齢者に対してボランティア活動をしていこうという気運が広まっています。

でもなぜ、この異国の地、ヨーロッパで、ドイツで、日本の「キャラバンメイト」が必要なのでしょう？

高齢化の問題を考える際に、現在どの国でも最大の問題となっているのが、認知症患者の急速な増加現象です。認知症については皆さんご存知かと思いますが、外国に住んでいる者にとっての厳しいのは、本人の意志に関わり無く「認知症患者は病気の進行とともに過去の世界、そして幼い頃の言葉と習慣」に戻っていくということです。

認知症にならなくとも、高齢化とともに後から身につけた言語が弱くなって行くこと、食事や生活習慣が若い頃、幼い頃へと戻って行くことは、外国に住む私たちも今では良く知っています。そういう背景では、ひとつの文化で育った人には、それに対応した支援や介護が望ましいのは言うまでもありませんし、特に認知症の場合には、本人の文化、過去を知らない人ができる援助も、制約を受けてきてしまいます。「助けたい、と思っても、何をどう助けたいか分からない」と、介護現場で日本人を見て来たドイツ人が言います。食欲がない時には夕食にご飯と焼き魚が食べたい、などと、ソーセージとパンで育ったその人にはとても想像できなかったのです。

日本の習慣を知らない人に、何が違うかを伝えたり、現地との文化が違うことによって援助できないことを、邦人同士が支え合い、認知症サポーターがカバーして行けるようにできるのではないのでしょうか。

キャラバンメイトが邦人サポーターを養成していくことで、日本国外の各地域でも、邦人が共に助け合い、共に高齢化に備えて行くことの大切さも伝わっていくのではないのでしょうか。

私たちは住んでいる国や町に溶け込み、周りの人々と協力し合うことを学んできましたが、高齢化と、特に一番大きな問題である認知症が、当人の好むと好まざるとに関わらず「文化」の問題を含んでいる限り、日本語での、また日本文化を背景にした介護や食事、対応のしかたが必要になります。そしてそういうことが大切であることを、日本語を通して、日本の認知症にたいする対応のしかたを通して、共に学んで行けるのではと思います。

そういう意味で今回日本のキャラバンメイト事業本部がキャラバンメイト育成のための講師を派遣して下さることは、在欧邦人の高齢化に対応する際の大きな支えとなるでしょう。

単に認知症についての知識を得るだけでなく、邦人が邦人を支えて行くということの必要性を、共に考え、共に組織化して行くために、皆様もぜひキャラバンメイトの資格をとってください。

<http://www.caravanmate.com/whats.html>、<http://www.caravanmate.com/contents.html>を参照ください。

渡辺・レグナー 嘉子